

広い視野での取材活動に基づく紙面づくり

増田 一世

やどかりの里には、各地からの要請に応えて、講師として講演に出向いている精神障害者（メンバー）がいる。その講師が集まり、派遣先を調整する会議が開かれる。その席上、「こんなチラシがあるんです。皆さんどう思いますか」と、ベテラン講師である菅原進さんからの提起があった。それは、精神障害者の移送を業務とするトキワ警備という会社のピラだった。昨年12月にトキワ警備を取り上げた報道番組をビデオにとっていたというメンバーもいた。そのビデオをぜひ見てみようということになり、講師登録をしている人たちが中心になって行っている学習会（各地で講演するメンバーが自分たちの講演の内容を向上させるために開いている学習会で、月1回オープンな形で開かれている。講師以外でも、希望者は自由に参加できる）で、このビデオを見ながら話し合うこととなった。

この番組から、私はさまざまな問題を感じた。移送の問題については、いずれ本誌で講師登録者学習会から、先日の話し合いをもとにした原稿を寄せていただくことになっているので譲り、マスメディアの報道のあり方について触れたい。実に安直な作り方であり、限局された視野でしかものを見ていないことをこの番組から感じた。もっとはっきり言うと、精神障害者への社会的偏見を助長するために番組が制作されたのではないかと思わざるを得なかった。この番組は、トキワ警備の社長を中心に「精神障害者の移送」について取り上げていた。この番組の制作にあたって、

制作者は、どれだけ精神障害者を取り巻く環境について、取材を行っていたのだろうか。どこに問題意識を持って番組づくりをしたのだろうか。キャスターの最後のコメントは、「保健所等の公的機関は、こうした民間業者のノウハウを見習ってほしい」ということだった。好意的に受け取れば、精神障害者の偏見を助長する意図などなく、単なる勉強不足と無知なのであろう。しかし、マスコミの持っている巨大な力を考えると、勉強不足と無知は大きな罪である。

こう考えていくと、毎日休む間もなく垂れ流されているテレビからの情報は、おおよそ狭い限られた視野での取材と無知からなっているのだと考えた方がいいのではないか。では、私たちは社会のさまざまな動きを、どのように捉えていったらいいのかという、自分自身の問題にもぶつかっていく。まずは、勉強不足と無知によって作られている情報を鵜呑みにしてはいけなく、という自覚を持つことが必要であろう。もちろん、そんな安直な番組ばかりであるとは思いたくないが、自分自身で考えて情報を取捨選択する目を持たなければいけない。そうした目を養うためには、学習が欠かせない。講師登録者学習会は大変地道な取り組みであるが、こうした相互で学び合うことが、大きな力になっていくのではないか。

そして、本誌の取材活動、紙面づくりにもこの番組を反面教師として位置づけたい。